
蛇と薔薇

奥離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇と薔薇

【Nコード】

N8182L

【作者名】

奥離

【あらすじ】

むかしむかしあるところにそれはそれは美しい「薔薇姫」と呼ばれるお姫様と、極悪なことでも有名な「蛇」という魔術師がおりました。

そんな二人のお話。

前編

昔々あるところに「薔薇姫」と呼ばれるそれはそれは美しいお姫様がいました。

同じぐらい昔々、同じぐらいのところに極悪なことでも有名な「蛇」と呼ばれる魔術師がおりましたとき。

そんな昔々の、二人のおはなし。

*

王城の廊下を”赤色”が歩いていく。

いや歩くというよりはもはや競歩に近い速さで進むその”赤”はよくみれば一人の女性だった。

赤い髪にルビーの瞳、唇は深紅でフワフワと広がるドレスも赤・・・唯一色が違うところを探せばそれらの色を際立たせるような白い肌だけだろうか。

人は皆、彼女のことを「薔薇姫」と呼ぶ。

生まれもってその身に纏う色彩もさることながら、大輪の薔薇を思

わせるその美貌がその由縁ともいえるだろう。

だがどうしたことだろうか。

笑みを灯せば瞬間に求婚者が列を連ねるであろうその顔はあからさまに”不快”を現していた。

彼女とすれ違うもの全てがその形相に思わず二度見をする。

長い長い廊下を進み、彼女が目指すは城の東・・・端のそのまた端に建てられている”魔術師たちの塔”とよばれるうちの古びた塔の一つだ。

ここには出入り口を守る衛士もいないため、歩く勢いもそのままに塔の扉を開ける。

無用心にも扉には鍵もかかっておらず大きな音をたてて薔薇姫を塔の中へと導いた。

そして腹の底から叫んだのだ。

「蛇”！！でてらっしやい！！」

だが返事はない。が構わず彼女は塔の上へと続く階段に足をかけた。

「蛇！！いるのはわかってるのよ！！返事をしなさい！！」

ふわりと広がるドレスをもともせず両手でがっつりとまとめて階段をかけあがるその姿は・・・とてもじゃないが優雅とは程遠い。

姫付きの乳母が見れば卒倒しそうな勢いだ。

「蛇！！聞いてるでしょ！！」

塔の最上階まで一気に駆け上がった薔薇姫は肩で息をしながらも主の居室へと踏み入った。

部屋の奥、沢山の書物が並んだ本棚の前に白い影が椅子に座している。

「蛇!!」

「……………五月蠅いわよ馬鹿姫」

椅子から立ち上がることも振り返ることもせず、心底嫌そうな声で
”蛇”は応えた。

「ぎゃーぎゃーぎゃーぎゃー……うるさいったらありゃしない、
そんなに怒鳴り散らさなくて聞こえてるわよ馬鹿姫……あ
ら違った”薔薇姫”だったわ」

ごめんなさいねえと謝罪なんて一欠けらも存在しない言葉に薔薇
姫は怒りを滾たぎらせた。

「じゃあ返事ぐらいしなさいよ!」

「五月蠅いっていつてるでしょ? 少しぐらい静かになさいよ」

そこで漸おしく”蛇”は立ち上がった。

薔薇姫と同じで肌は白いがどちらかという”病的”に白く青白い。
腰まであるこれまた白い髪は前髪を数本たらしめているほかは全てオ
ールバックにされ後ろにたらしられている。

顔全体でみれば整っているほうなのだろうが、その細く吊り上った
墨を入れた眦まなじりと人を小馬鹿にしたように薄く笑う紫の紅で塗られた
口元は本物の”蛇”を連想させる。

更に極めつけといわんばかりに、その左目の下には更にそのイメー
ジを強くするように白蛇の紋章が彫られている。

ぬめりとして小賢しく、陰湿な印象を見るものに抱かせる、それが”蛇”だ。
薔薇姫は立ち上がり振り向いた”蛇”を見上げると「うげっ」と思わず唸った。

「ちよっ……なんて目に痛い格好をしてんのよ」

「ああら、ス・テ・キでしょ〜？」

クルッと一回転して見せるが目に痛いのは変わらない。

本来ならば灰色で統一されているはずの魔術師のローブはパツションイエローとシヨッキングピンクで彩られ、ありとあらゆるところにビカビカとした貴金属が縫いこまれている。

……もちろんローブの裾には薄ピンクのフリルがびっしり。

「どこがよ！前からいつてるけどあなた頭おかしいでしょ！？」

「小娘にはこのよさがわからないのねえ。残念な頭なこと」

「一生理解できなくて結構よこの……オカマ！！」

びしっと蛇の顔が固まる。

”彼”にとってそれは禁句にも近い……だって自称”ご婦人”だから。

その様子に薔薇姫がはっと鼻で笑えば、蛇は眉間に青筋を立てながら冷笑を浮かべる。

そうして暫く睨み合いの膠着状態「じゅうちやく」が続いていたが……
部屋の中にあるありとあらゆるものが互いの間の宙を飛ぶまでにその時間はかからなかった。

「
 ……
 ……？一体何の用なのよ小娘」

互いの体力がつきるまで口論と物の投げ合いは止まらない。
 今日もいつものように小一時間たった頃、ぐつたりと二人仲良く（
 ?）床にひざをつきながら息を整えはじめ、漸く本題へと入るのだ。

「そつ・・・そつよ・・・全く無駄な時間をとったわ・・・」

乱れに乱れまくったドレスやら髪やらを整えながら私は手近な椅子
 へと腰を下ろす。

「ちよつと勝手に座るんじゃないわよ」

それに目ざとく文句をつけながらも蛇は片手を振りあげ”魔法”の
 力で散乱した部屋を片付けると自分も元いた椅子へと座りなおした。
 その際ちよつかりと（自分の分だけの）紅茶を出すのも忘れない（
 この才カマめ）

「それで？」

さっさと用件だけすませろ、といわんばかりの様子で催促する。
 ……悲しいかな長い付き合いだ（蛇の年齢は知ったことじゃない
 が私が生まれたときからこの姿だったというのだから中身は結構な

ジジイかもしれない）蛇が長つたらしい話が大嫌いだということは重々承知している。

”簡潔に”そうでなくては話半分で流されてしまう。

だからこそこれでもかというほどわかりやすい一言でまとめてやることにした。

「私を女にして頂戴」

ぶっ・・・

「あつ間違えた・・・・・・・・って何吹き出してるのよ」

きたなーいと呟けば、これまたどこでそんなもの仕入れてきたのかというほどのドピンクフリフリなハンカチで口元をぬぐいむせる息を整えた蛇が怒鳴った。

「あなたが突拍子もないこというからでしょうが！？しかも間違えたって何よ！？」

「何よ、短気なあなたのためにわかりやすく一言でまとめてあげたんじゃない。ちなみに正しくは”私を女らしくして頂戴”だったけどねー！」

「間違えといて威張るな！！・・・って、はあ？」

訳がわからないという顔で蛇はこちらを凝視した。

「女らしく」・・・って

蛇の視線が私の体を上から下まで動いた。

「一応”薔薇姫”って呼ばれるだけあって顔は充分すぎるほど整ってるでしょ？まあ私ほどじゃないでしょうけど？中身はともかくその見かけでだまされる男は数知れず、まあ見た目でだけで判断する男も男よねえ、肌だって腹が立つほどしシミ一つないしああもうホントムカツクわね、一応出てるところも出てるし引っ込むところも引っ込んでるし見た目だけでいうなら何も問題ないじゃない見た目だけなら。」

あつまさかその牛乳うしちぢみたいな乳をまだ増やせとかいうんじゃないでしょうね？キイイクくやしいく！！あんた私に喧嘩売ってんの！？」

「……………喧嘩売ってんのはあなたのほうじゃなくて？」

こめかみがピクピクするのを抑えながらも私はふかーく深呼吸をした。

いけないいけない、また話が脱線するところだったわ。

「私だってあなたに頼むのはトーーーーー……………
……………つつつても不・本・意だけど！背に腹はかえられないっ
ていうか、最終手段っていうか」

本当にこれは最終手段。あんまり気が乗らないといえは乗らないんだけど。

「仮にもあなただって城付きの魔術師だし？中身がどんだけ変態で変人で、見た目だってもうこれでもかっていうぐらい近寄り格好してたって国一番の魔術師の”蛇”の称号をもってるには多分間違いないからこうして恥を忍んで頼みにきてるのよ？」

「頼みに来てる人間の態度じゃないわよね。ていうかしつかりさっきの根にもってるじゃない」

あと多分って言うのやめなさいよ、とぶつぶついいながらも蛇は片手を振るともう一組ティーカップを出現させた。

「あんたって子はホント埒が明かないわ」

至極面倒くさそうに、なんとなく諦めた様子で蛇は嘆息する。

「頑固に居座られ続けられるのもうっとうしいから話だけはきいてあげる・・・だから一からきちんと説明なさい」

長い付き合いだから知っている。こういう時の蛇は何だかんだで頼みを聞いてくれるものだ。

冷たいようで、実はほんのちよっぴり優しい(多分)

それがこの国で筆頭魔術師であり魔術師の塔の長でもある”蛇”なのだ。

前編（後書き）

自サイトの小説たちが進まないのだからちょっと浮気して、
そんなに長くないです。

変態って素敵な言葉だと思っんですけどどうでしょう（笑？

中編

私が父王に呼び出されたのはつい先日のこと。^{わたくし}

王族らしい、といえは聞こえはいいかもしれないがはっきりって政^{まつりごと}以外のことに興味がない男だ。

親子として触れ合ったことなど生まれてから一度も存在しない。

数多^{あまた}いる兄弟たちの半数以上は国の祭事が絡む以外は父王に目通りすらしたことがないだろう。

父王と顔をあわせる数で言えば上位の中に入るのではないだろうか

・・・かといって別に嬉しくもななんともないのだが。

「そなた今年でいくつになった？」

執務室へ赴けば挨拶もままならぬうちにそう切り出される。

「19でございます」

ああ・・・”また”か。

私が兄弟たちの中でも父王に拝謁する機会が多い理由、それは”駒”として有効に使えるからだ。

父にとつて子供^{私たち}は”政の道具”でしかない・・・特に王族の女なんてそれ以外に使い道がないと思っっている男だ。

12人いた姉妹たちと3人の妹姫は皆外国へ嫁いでいったし、まだ国元に残っている妹姫たちでさえすでに家臣や外国への嫁ぎ先が決まっっている。

・・・女は16前後で結婚するのが通例なこの時代、はっきりいつて19の私など行き遅れもいいところだ。

では何故私がどこにも嫁がされずに今も国元に留まっているのか？
巷では”薔薇姫があまりにも美しく愛しいものだから王が嫁にだす

のを拒んでいる”のだ、と王の親馬鹿っぷりが伺える何とも微笑ましい噂が流れているそうだがそんな訳がない。

私は「餌」なのだ。

近隣諸国へ広がり今では知らぬものなどいないというほど広まった麗しの”薔薇姫”の存在。

その姿を一目見ようと外国から足を運ぶ王族・貴族は数知れず、その姿を一度でも目にすれば国内外を問わず求婚をするものは後を絶たない。

その数は年を得るごとに増えていく・・・それが父王の狙い。

外国の王族・貴族が入国すればそれだけで市場の”金”が動く。商人たちが活気付き旅行者も増える。

私という餌をちらつかせて外交でのやりとりですらこちらの思うとおりに進めてしまうのだ。

妻にと乞われればやんわりと話をそらし代わりに（それなりに見目麗しい姫たちはそろっている）他の姫をうまくあてがう。・・・そうやってこの国は力をつけてきたのだ。

この国にとって、いや父王の政にとって一番有益となりうる相手が見つかるまで私は嫁がされることはないのだろう。

”薔薇姫”^{わたくし} という存在はそのためだけにあるもの。

「そうか」

何の感慨もなく父王は頷く。

今度はいったい何を命じられるのだろう。大使として隣国の舞踏会にでも行かされるのか、それともはるばる遠くから訪れた外国の王族たち相手に愛想を振りまいていればいいのか。

「10日後、レザンの第2皇子が来る」

レザン・・・レザン帝国。スイリア海を挟んだ向こう側にある大陸で近年力をつけてきたといわれる大国だ。

確か去年妹姫の一人が親睦の証として第1皇子に側室として嫁いでいったはずだが・・・

「レザンの皇帝が来年にでも退位する話は知っているな？」

「はい」

確か胸を患っているはずだ。

年も年のため第一皇子に位を譲るのではと話がでたのは一年ほど前・・・だから妹は嫁がされた。

「どうもあちらの貴族たちは第2皇子に肩入れしているものが多いらしい」

「そう・・・なのですか」

それはつまり次期皇帝には第2皇子のほうが有力であるということ。つまり・・・

「そなたもそろそろ良い齡だ。私としてもこれ以上婚期が遅れるのも忍びない」

父王の言葉は、しかし私の耳には違う言葉に置き換えられて聞こえる。

・・・いくら美しくてもそれが永久とわに続くものではない。

”餌”として使える時間も限られてくる。ならばここらが頃合か・
・

「姫よ、そなたは賢い子だ。ー・・わかってくれるな？」

レザンの第2皇子には今現在、妻はいないらしい。そして今回の訪問も表向きは外交だが”薔薇姫”を目当てにやってくるのだとか。だからこそ必ず正妻の地位を掴み取れ、と。

「はい、必ずやお父様のお心に添えますよう」

「ああ、期待していよう」

・・・・・頭を下げたおかげで満足気な胡散臭い父王の笑みは見なくてすんだのがせめてもの救いか。

*

「そう・・・」

私の話を珍しく茶々をいれることもなく聞き入っていた蛇はそう呟くと冷めた紅茶を口に含んだ。

「あんたもついにお嫁にいくのね」

「ええそうよ。おかしい？」

「別に」

「……本当に珍しい。いつもの蛇なら「あんたが結婚？はっ！ちやんちゃらおかしいわこの馬鹿娘。あんたなんて出戻りがいいところよ、むしろ私のほうが花嫁にふさわしいわぁ！」ぐらいのことを言われるのかと思ったのだが……」

「……で、話はわかったけどどうしてそこからさっきの”女らしく”になるのよ？」

「え……ええそれなんだけど、レザンの皇子「ガイルシア殿下」についてうんだけどね」の好みがおとなしめの女性らしくって」

「ああ成る程、あんた猫かぶればそれなりだけど素はがさつで短気で口が悪いお転婆馬鹿姫だものね。」おとなしい”なんてあんたには一番縁遠いものよねえ」

「……前言撤回、いつもの蛇ね。」

こめかみがピクピクするのを我慢する。

「で、私に魔法で”女らしい”いかにも皇子が喜びそうな”おとなしい女”にしるってこと？」

「そうよ」

確かにね、おとなしいなんて私とは縁遠いわよ？

私だって伊達に生まれた時から”お姫様”やってきたわけじゃないわ、猫かぶりなんてお手の物だしやるうと思ったら”おとなしい”

女だって演じてやるわ。

でも”結婚”するってなるなら・・・

「正直にいうとね、一生猫かぶってるなんて私には無理だと思うのよ」

肩をすくめて「無駄に付き合い長いんだから私の性格わかってるでしょ？」と問えば蛇は静かに頷いた。

「だから、よ」

「でもあんたはそれでいいの？そういう魔法をかけるってことはあんたがあんたじゃなくなるってことよ？」

蛇は立ち上がると私の目の前までやってきて顔を覗き込んできた。

「あんたがそこまでやる必要があるの？」

性格を変えろということとは精神を汚染するということだ・・・魔術師の中でも高位クラスの術師しか使用を許されていない、とても危険が伴う魔法。

「結婚するまで猫かぶってればいいだけの話じゃない。しっちゃんこつちのものよ？」

「・・・それじゃだめなの」

蛇と同じ事を考えたこともあった。

でもそれでは駄目なのだ、相手はレザン帝国。

父王が私を漸く手放そうとしたのは何も歳のせいだけじゃない、や

はりそれだけの価値がレザンにはある。

「今は確かに同等の立場にいる国かもしれないわ、でもいずれ……
いいえ多分もうすでにレザンの国力はこちらを上回っている」

父王の”駒”として生かされてきたのだ、情報は私にとつても”武器”となっている。

「ガイルシア殿下は有能だけどとても女癖が悪いと聞くわ。例え正妻になれてもいつその地位がおびやかされるかわからない」

父王が望むのは確固たるレザンとの繋がり。

猫を被つて形だけの妻になるだけでは駄目なのだ。

「だからよ」

もう一度、強く呟けば蛇は心底あきれ返った顔をした。

「……不器用な子ね」

「あら、知らなかった？」

「知ってるわよ。どれだけの付き合いだと思ってるの」

あきれたように蛇は嘆息するとホント理解できないわ、と呟いた。

「そこまでする価値があのおっさんに……この国にあるとは思えないけど」

「……あなた仮にも城付きなんだからそういふ発言はどうかと思

「うわよ？」

「あぁら知らなかった？私あまりそういうのに頓着しない夕子なのよ」

「知ってるわ」

まるでさっきの繰り返しだ、と思わず笑みがこぼれてしまった。

「・・・あなたの言う通り、そんな価値はないかもしれないわ。でも、ね」

立ち上がり蛇の目をまっすぐ見つめる。

「私はこの国の王女として生まれてきたの。だとしたら当然の義務だと思っわ。それが私が私である存在意義なのだから」

「覚悟はあるようね」

「ええ」

強く頷けば蛇はわかったわ、とどこからともなく杖を取り出した。

「馬鹿姫なりにちゃんと考えてきたようだからソレに免じてしょうがないからこの天才魔術師様がやってあげてもいいわよ」

「馬鹿姫っていいすぎよこの変態魔術師」

「誰が変態よ。あんななんか馬鹿姫で充分」

そういいながらも蛇は呪文を唱えていく。

こうやって何度も何度も繰り返してきた蛇との会話ももう……な
いかもしれない。

そう思うと、少しだけ寂しい気がした。

「じゃあね馬鹿姫、絶対出戻るんじゃないわよ」

「……あなた本当に最後まで喧嘩売るのはね」

魔法がかけられる。

中編（後書き）

中篇です。

本当は前編・後編の2部作にしてしまおうかと思ったんですがキリが悪いので3つにわけました。
次が終わり。

後編

「おお、噂に違わず何とお美しい」

その夜、レザンからの使者たちをもてなすために城では盛大な舞踏会が開かれていた。

賓客であるレザン第二皇子のガイルシアを中心に人の輪が広がっている中に”彼女”はやってきた。

王に手を引かれ広間へ続く階段を降る彼女の姿に人々の目が釘付けとなる。

ふわふわと広がる薄い桃色のドレスを揺らし柔らかく微笑む彼女はまさに一輪の”薔薇”そのもの。

皇子一行も例外ではなくその姿その一挙一動に目を奪われ目の前に彼女たちが来るまで、まるで動きを忘れたように微動だにしなかった。

「ガイルシア殿下、我が一番の宝物を紹介しよう・・・我が愛娘、薔薇姫だ」

さあ、と促されれば薔薇がガイルシアに向かって極上の笑みを浮かべる。

「お初にお目にかかりますガイルシア皇太子殿下、お会いできて光栄にございます」

ドレスの裾をつかみ深々と淑女の礼をとれば熱に浮かされていたかのようにぼおっとなっていたガイルシアが我を取り戻し返礼する。

「・・・どうぞ、ガイルシアとお呼びください姫」

薔薇姫の手をとり跪けば彼は甘い声で囁く。

「私こそ噂の薔薇姫に会える日が来るとは天にも昇る気持ちです。どうかその手に口付けを落とす榮譽をいただいても？」

「はい、ガイルシア様」

照れたようにはにかめばその手に口付けが落とされた。

一对の絵画のようなその光景に広間のあちらこちらからうらやむような声が上げられる。

*

(ああー・・・鬱陶しい・・・)

さつきから手を片時も離すことなく・・・それどころか時間がたつにつれ体の密着度合いも高くなっている気がする。

(猫被りいっもならもっとうまくあしらえるのに・・・)

・・・魔法はかけてもらえた。

でもこういった魔法は意識全体に融けるまでに時間がかかると蛇は思った。

まるで自分がもう一人いるみたいな感覚だ。体を動かしている”人

形”の自分と、意識だけの”本当”の自分。

なまじ元の自分の意識がはつきりしている分、齒痒いことこの上ない。

この皇子の好みとやらの”おとなしい女”というものはなすがままなされるがまま、つまり自分にとことん従順な女が好きってこと。

気を良くした目の前の単細胞は調子にのってくるし・・・ああ今お尻触ったわよこいつ！

調子に乗ったお馬鹿にこっそり制裁してやることもできない・・・うつつ魔法って面倒くさいわね！！やっぱりもう少し後でかけてもらったほうが良かったのかしら？

でもそのおかげ（？）か手ごたえはばっちりだ。

広間の奥に鎮座している父王も満足げな視線をよこしている。

宴も半ばに差し掛かった頃、手を引かれ夜の庭園へと連れ出された。しばらく歩き人気のない四阿あずまやへと腰を落ち着けると皇子はうっとりとして語りだした。

「姫、貴女にこうして出会えたことは最早奇跡の賜物としかいいようがない」

わざわざ薔薇姫わたくし目当てに海まで越えてきたのはあなた自身でしょうが。

「私は運命というものを信じないのですが」

それは奇遇、私も信じてないわ。

「・・・運命はあるのでしょうか。貴女こそが私の運命・・・」

あー・・・やっぱり早々に魔法かけてもらってよかったかも。猫

被ってただけじゃ絶対砂吐いてた。

「ああ私の運命（ト）の女貴女はどうしてそんなにも美しいのかっ・・・」

知らないわよそんなことっ！！もっつ・・・以下略っつ！！

どっから湧いてくるのか不思議なくらい美辞麗句を並び立て続ける相手にどつと疲れがこみ上げ内（ト）の意識は外の音を遮断した。

途端、シン・・・と静まり返る私の中。

その内本当（ト）の私は消えるのだろっ。

蛇の魔法によって作られたおとなしい私（ト）に段々と融けていく。

後悔しているのかと問われれば・・・どうだろう何ともいえない。

悲観するわけでもなく嘆くわけでもない。

・・・あなたがそこまでやる必要があるの？

私が薔薇姫（ト）でなければ、私が父王（ト）の子供でなければ、私が王女でなければ・・・こんなことはしなくてすんだかもしれない。

でも私は薔薇姫で、王の娘で、王女だ。それは変えられない。

今の私を突き動かしているのは愛国心や父王のためでは決してない、それだけはいえる。

では何なのかと聞かれれば・・・そう、あえて言うなら”義務”だろうか。

私が今の私として存在しているための”義務”

だから後悔しているのかと問われれば、よくわからないとしか答えられない。

魔法心の侵食はとても穏やかだ。静かに静かに・・・そつと融けてしまえるのではないかというほどに穏やかな侵食と静寂。

あまりにも心地が良すぎてもうこのまま意識を手放してしまおうか

と思ったその時、ふと微かに感じる体おその違和感に浮上すれば我が目を疑った。

(ちよっ・・・!!なっ!?)

押し倒されていた。しかも口付けられてる・・・舌付きで。

(何がどうしてどうなったのー!!舌を入れるなー!!)

「ああ姫、夢のようです、貴女が私の妻になってくれるなんて・・・

」

早い!!すかさず突っ込んだが相手には届かず。

どうやら求婚してOKだったので感激のあまりそのままゴーみたいな感じらしいが。

(もうちよつと空気読みなさいよ!!いきなり押し倒すってどういうこと!)

いやまてまて、落ち着いて私。そうよ、願ったり叶ったりじゃない。そもそもここまでやった目的だってガイルこれシアの本妻狙ってのことなんだか・・・

ドレスの裾がまくられ太ももに男の手が這う。

(ちよっ!!!)

ちよつと待った。駄目でしょ、この男ここでや・・・ごほんっ!じゃない・・・ここで事に及ぶ気じゃないでしょうね!?

いくらなんでも展開が早すぎる。

レザンの第二皇子は手が早いというのは、本当だったようだ。

(この色欲皇子!!)

そうこうしている間にも太ももを撫で回していた手は尻へと周りそのまま内腿へ……

口内をなぞる舌の動きとも相成ってぞわぞわと背筋を這い増す嫌悪感。

(駄目!!無いわ!!無理無理無理無理無理無理!!)

「……いやっ!」

思わず口から出たのは拒絶の言葉と被さる体を押しつけるように伸びた両腕。

(あつ……あれ?)

「姫?」

「えっ?あつ」

しまった。目の前には突然の拒絶に疑問を浮かべた顔と、事を中断させられあからさまに不機嫌を宿した瞳があった。

まずい、これはまずい……とにかく何か言い繕わねば。

「あつあの……私、このような場所で……」

目を伏せ頬を赤らませもじつと言葉を濁せば皇子は「それもそつで

すね」と納得したようだ。
身を起こさせると、「それでは後でお伺いいたします」とそつと耳元で囁かれたのでとりあえず「はい」と頷くしかなかった。

*

薔薇姫かのじよの小さな恥じらいという抵抗に若干興がそがれはしたが、姫の部屋に忍び込むという楽しみができたので良しとしようか。
月光のもとあの白い柔肌を堪能してみたかったものだが・・・見かけによらず初心な姫には少し刺激が強かったのかもしれない。
あの反応、間違いなく処女おとめだ。”薔薇姫”ともてはやされあれだけ男受けのする体と美貌の持ち主だ、もしや貞操はすでに無いかもしれないと思っていたがそれも杞憂に終わったようだ。

ならばまた一つ楽しみができた。
社交慣れはしているようだが真に男というのを知らぬあの体を更に自分好みに仕立て上げられるというならばさきほどの小さな拒絶も不快にはならない。

何かと強したかな王の娘ということから少し身構えてはいたが予想外に従順でいかにも世間を知らぬ深層の姫君といった様も気に入った。
外見も中身もまさに私の理想の乙女・・・はるばる海を越えてやってきたかがあるというものだ。

下の王女と結婚した第一皇子あひのみの悔しがる顔が目に見えようか・・・
求めた薔薇も玉座も手に入らぬとあらばあの男はどんな顔をみせるだろうか。

そんなことを考え緩む口元を抑えることもできずに男は人カイルシア気の無い廊下を進む。

姫の部屋に向かう廊下は人っ子一人いないように静まり返っている、警備のものにすら出会わない。

しかし疑問には思わない、きつとそう手は回されているのだから。教えられた部屋の扉には鍵はかかっておらず軽く押せば彼を誘うように扉は開いた。

身を滑り込ませるように中に入れば奥の寝室から薄明かりが洩れている。

それに導かれるようにそちらに足を進めれば髪を梳き真つ白なネグリジエで寝台の上に腰をかける乙女の後姿が目に入った。

夜会のドレスよりも体の線を強調させるネグリジエから白い肩のぞく・・・その様にはやる気持ちを抑えながらそつと近づき抱き込めば乙女の肩がわずかに揺れた。

「愛しい人、怯えないで。何も怖いことはないのだから」

微かに灯るランプの明かりの元そのまま寝台の上に組み伏せば恥ずかしいのか顔を手で覆い、こくりと頷いて見せた。

男の嗜虐心をそそのその行動に思わず貪りつきたくなる衝動を呑み込む・・・夜は長いのだ、焦る必要はない。

「私に全てをまかせて」

口付けを落とすために顔を近づける・・・ああ何て肌理の細かい白い肌なのだろう、さらりと触れる頬は絹のようにさわり心地がいい。顔を覆う手に指を絡ませそれをどかせば長いまつげに縁取られた潤んだルビーの瞳が・・・

「え？」

ない。

長いまつげはあった。ふさふさだ。これでもかというぐらいのふさふさ感。

しかしその中に埋まっているのは赤い瞳ではなく銀色の瞳。おかしい、薄闇で目がおかしくなったのかとも思ったが明らかに色が違う。戸惑うガイルシアに薔薇姫はクスクスと笑みをこぼした。

「ガイルシア様？いかなさいました？」

「え、いや姫・・・その瞳は一体・・・？」

「瞳？ああ・・・」

何だ、そのことですかと姫は笑う。

だが花が咲いたように笑う、とは形容しがたい笑いだ。ニタリと笑うその顔は例えて言うならそう・・・

”蛇”のような

その瞬間、ソレは徐々に変質した。

「いくら天才の私でも瞳だけは変えられないのよね。ほら？瞳って人間の魂の入り口だっていうじゃない？それだけ重要な部分ってことなのよ」

コロコロと鈴を転がしたような甘い声は途中から女性にしては低く、どちらかというと男・・・いやもう完全に男の声としかいいようがないダミ声になっていく。

赤の髪は白に豊満な胸は平らな胸に、柔らかな肢体は筋肉質な硬さに・・・唯一変わらないのはその肌の白さと肌理の細かさぐらいだろうか。

「ひっ」

組み敷いていた体がどこからどう見ても男の体になっていく様に驚くなどというほうが無理があるだろう。

しかも変化したのは体だけ・・・つまり衣服はそのままだということ。

ガイルシアは慌てて寝台を降りるとソレを指差してわなわなと体を奮わせた。

「なっ何者だ貴様！！」

「あらん？私のこと知らないのお？心外だわあ」

白の長髪をさらりとかきあげ寝台に横たわる男はふふんと嫌な笑みを浮かべた。

「私は”蛇”よ、ご存じないかしら？」

「！？筆頭魔術師のあの！？嘘をつけ！！お前のような見るからに変質者でオカマみたいなやつが”蛇”のはずがな」

「あんた五月蠅いわよ、少し黙ってなさい」

「っ」

ぱとりと指を鳴らせば途端ガイルシアは意識をなくし盛大な音を立ててその場に崩れ落ちた。

「頭だけじゃなくって口も軽い男は嫌われるのよ？・・・さあもう

いいわよ、でてらっしやいな」

「……………一体どういつつもり？」

蛇の声に促されカーテンの間隙から姿を現したのは本物の薔薇姫。彼女は訳がわからないというのと、憤慨した表情を織り交ぜた顔でその場に立ち尽くしていた。

「見ての通りよ」

「わかるわけないじゃないちゃんと説明して！！……………それよりまず先にソレ着替えて頂戴」

ただでさえ無駄に身長はあるのだ、ぱつっんぱつんのネグリジエを来たオカマ……………もとい男なんて見ていただけで気分が悪くなる。しょうがないわねえ、と蛇片手を振ればいつもより少し控えめの、だけどやっぱり奇抜なローブがその身を包んだ。

「……………何？同情？」

「違っわ」

「それじゃ私を笑いに来たの？」

「違っ」

静かに否定する蛇に私は苛立ちを隠せない。

「じゃ一体何なの！魔法だって途中で解けてしまったわ！！全然効いてないじゃない！それにこんなこと……………っもう駄目だわ……………」

あなたこれがどういいうことかわかっているの！？破談させる気！？」

「ええ、そうよ」

「！？」

思いがけない蛇の言葉に私は言葉を詰まらせる。

(じゃあなんで・・・)

なんで魔法をかけたの？

私の覚悟を聞いてくれたんじゃないの？

「魔法はかけたわ。でもね、あれはあなたが望んでいたような魔法じゃない。そもそも人間の精神こころを根底から書き換えるなんて無理なのよ。出来るのは他人の体を人形のように操るような”傀儡かいらいの魔法”・・・私があんたにかけたのはコレよ。あんたの精神と体を切り離して体を私が操っていた」

「じゃあ途中で私が元に戻ったのは・・・」

「あらかじめあなたが強い心で”戻りたい”って思えば術が解けるように細工をしておいたの」

「何で・・・」

「だからいったじゃない。”破談”にしたかったのよ、私は」

どうして？なんで？

訳がわからない。

「あんたが”本気”なら私も諦めたわ。でも違ってたでしょ？」

「そんなっ！私は本気で・・・」

「じゃあ、何故あの時拒んだの？」

「っ、それは・・・」

言いよどむ私に蛇が更に続ける。

「嫌だったからでしょ？こんな顔だけ男に触られるのも嫌だったんでしょ？」

いつの間にか蛇はすぐ目の前にまでやってきていた。蛇の影が重なるように私に覆い重なる。

「素直になりなさいよ、馬鹿な子ね」

ローブに包まれるようにぎゅっと抱きしめられた。

「だって私は・・・」

「薔薇姫だから？王女だから？・・・はっ、そんなの関係ないわ。魔法までかけて自分を捨てようとしている時点で逃げたいのがみえみえじゃない」

抱きしめられているとローブからいつも蛇がつけている薔薇の香水の匂いが鼻腔をくすぐった。

きつくなくほのかに香るその匂いに・・・心が落ち着く。

「助けてほしかったら、逃げたかったら正直に言いなさい。本当に馬鹿なんだから、何でも一人で背負うことなんかないのよ」

長い付き合いだからあんたのことなんて全てお見通しよ、と蛇が笑った。

「何で・・・」

「ん？」

「何で？」

何でそこまで言ってくれるの？と問えば再び蛇が笑う。

「馬鹿ねそんなの決まってるじゃない」

いつものニタリとした嫌な笑みはなく、優しい優しい微笑で。

「好きだからに決まってるじゃない」

*

「っつていってきまらなくてわよ」

蛇の魔法で場所を移動した先は父王の居室。
突然現れた二人に動じることもなく王はふっと笑った。
ただ一人動じていたのは、私のみだったが。

「見返りもなしにか？そう安くはないぞそれは」

「あら、実の娘を物扱いするのはいい加減やめなさいよねこのクソ爺。胸糞わるいつたらありやしないわ」

そついいながら胸元にかけていたペンダントをはずすとソレを王に投げ渡した。

「それ、返すわ。城付きにもそろそろあきてた頃だし」

「それで済むとも思つか？」

「ああら相変わらず業突張りせきつかりな爺ね、早くくたばっちゃいなさいよ。でもそつね・・・確かに、この子の価値はそれだけじゃすまないわね」

ふふんと笑い返すと蛇は杖を取り出しソレを振るう。

「レザンの皇子様は原因不明の高熱により”不能”になってしまいましたとき。世継ぎが作れない皇子に皇帝がつとまるのかしらねえ？勃たないともあればあの年中発情皇子様は意気消沈ものよねえ、この先使い物になるのかしら？ああそつそつ、第一皇子に嫁いだ妹姫がたつた今懐妊したわよ。私の予想では男の子、第一皇子にとつては初子ねえ。あと”これから先第一皇子の跡継ぎ男の子供を生めるのはその子だけ”。さあこれで満足かしら？」

軽く行われたが今のはとてつもない力を持った”呪い”と”祝福”の魔法・・・詠唱もなしに行われたその魔法に私は目を見張る。父王もそれに納得したのか「ふむ」と顎をなでた。

「・・・・・・・・まあよかろう。好きにするがいい」

「ですって、じゃいきましようか」

「え？ええ？」

次の瞬間、再び違う場所に移動してしまっていた。見覚えがある、これは蛇の塔だ。

「何呆けた顔してんのよ。あんたはこれで”薔薇姫”よじいおじゃなくなっ
たってこと、わかった？」

「薔薇姫王女・・・・・・・・じゃない？」

私を繋ぎとめていたものがこんなにあっさりとなくなってしまうものだろうか。

「なに？嫌だった？」

「そうじゃない！！そうじゃない・・・・・・・・けど」

なんだか

「自由って現実味がないわ・・・・・・・・」

「そつ？じゃあ」

「！？」

三度、目の前の景色が変わる。

そこは今まで見たことも来たこともない場所だ。

どこか知らない土地の知らない丘。

満天の星空の元、月明かりに照らされているのは広大な草原。

「凄い・・・」

「どう、これでも感じない？・・・ロザリア」

微かな風と共につむがれた私の名前。

久しく呼ばれることのなかった本当の私の名前。

薔薇姫じゃない、ただのロゼリア。

「ねえロザリア。私、仕事やめちゃったから今とつても暇なのよ。

旅でもしようかと思うんだけどあんたがどうしてもっていうなら連れてってあげてもいいわよ？」

何か良からぬことを考えてそうな陰湿な笑みと奇抜な服装。

一見すると本当にただの変質者が悪役にしか見えないおかしな魔術師。

それでも彼は呼んでくれる。私の名を。私だけの名を。

だから私はその手をとる。

「ええ、連れて行って私の魔術師^{まじゅし}。でもその前にあなたの名前を教えてください。」

そして何度でも呼び合おう二人の名を。私たちのこれからの旅のため。

*

むかしむかしあるところにそれはそれは美しい「薔薇姫」とよばれる王女様がいました。

ある日王女様は「蛇」と呼ばれるとてもとても悪い魔術師に連れ去られてしまいました。

どれだけ探しても探しても王女様と魔術師の行方は知れず。

とうとう国中のひとから愛されていた王女様は帰ってくることはありませんでした。

でも知ってます？実は遠いどこかの国でよく似た二人を見かけたっという噂があるんです。

とてもとても幸せそうでしたと聞きますが・・・どうでしょう？きっと他人の空似というものでしょうね。

むかしむかしのお話。

後編（後書き）

これでおしまい。

でもちょっと蛇の番外編が書きたいかも。
なんでカマ口調なのか、とかね。実は理由があるんですよ。

番外編く勘違い(前書き)

番外編、蛇のお話です。

彼が何故あんなってしまったのか。

番外編く勘違い

私は昔からとても偏屈な人間だった。

師にはよく「お前には愛想がたりない」と嘆かれていたし、数少ない友人の一人でもある兄弟子に「お前もつと人生楽しめよ。こう何か魔法以外に入れこむようなもんとかないわけ？」と問われれば「ない」と即答していたものだ。

魔法以外に興味がなく、他人と接触することに何の意義も見出せなかった私はただただ毎日を魔法のために過ごしていた。

学び、使い、更にそのより深くを探求する・・・ソレだけが私の全てであり生活である。

それ以外に私の心を動かすものなど何があつたのだというのだろうか。

魔法の探求に勤しみ、気づけば師や兄弟子と同じ魔法使いの中でも最高の榮譽であり地位でもある”魔術師”の称号を得ていた。周囲からは賞賛の声ややつかみが聞こえもしたがそれすら私にとってはどうでもいいことでしかない。

それから数年、師から王城魔術師筆頭”蛇”の号を受け継いだ時も周囲と私の反応には大きな温度差があつた。

”蛇”は私にとって魔法の研究を更にしやすい環境にしてくれただけのモノでしかない・・・しかしそう思っていた矢先、師は私にこう”予言”した。

「お前はこれから先、そう遠くない未来にお前の”生きがい”に出会うよ」

おかしなものだ、師だって知らないはずがないだろう私にとっての魔法はすでに見つけてしまっているではないか。

・・・だが先見みきよみの力に優れている師の言葉の重みは弟子である私が十分に承知している。

では私が出会うであろう”生きがい”とは？

その予言よげんを胸に秘め、更に数年。

私はついに出会ってしまった。

城付きの”蛇”となった私は生来の性格も相成ってますます籠もりきりの生活を送っていた。

与えられた研究塔でもくもくと日々を探求のために過ごす・・・人付き合いも必要最低限で済ましている

私の塔を訪れるものは極端に少ない。

だがその日、塔を訪れたのは珍しい人間たちだった。

現王の数多い側室の一人から使わされたという側室付きの侍女たちは慌てたように塔を訪れ半ば引きずるように私を塔から連れ出したのだ。

有無を言わせず連れ出されたのだから私の気分は最悪だ・・・しか

し渋って途中帰ろうとすれば彼女たちは泣きじゃくる始末。・・・面倒くさくなつた私は諦めにも似た境地でおとなしく連れて行かれることにした。

せめても、と嗚咽の中説明を求めればどうにも呼び出した側室ほんにんが無事出産を終えたものの

(元々そんなに体は丈夫じゃなかったようだ) 体力を使い果たしてしまつたのか危篤の状態に陥っているらしい。

朦朧とする意識の中で、最後にせめて無事生まれた我が子に祝福(魔術師によつて赤子にかけられる一種の厄除け)を授けられるところが見たいと願つた、とのことだ。

ならば魔術師の中でももつとも力のあるものを・・・と主の最後の願いを存分に叶えようとした彼女たちが目に付けたのがこの私。

部屋に通されれば、仄かに漂う血の匂いが鼻をついた。

その奥、広めの寝台の上には(元気な頃にはさぞ”美しい”部類に入っていただろう) 頬のこけた蒼白な女が一人とそれ囲む悲嘆にくれる数名の侍女や医師たちが目に入る。
そのすぐそばに置かれた小さな揺り籠。

周囲に促され横に立ち中を覗き込めば真新しい産着にくるまれた小さな体・・・そして”赤”

生まれて間もないというのに美しく輝く白い肌、桃色の頬と小さな唇、更にその中でも一際映えるその色彩、わずかにだが頭皮に生えた鮮やかな”赤”色。

「蛇殿」

自分を呼ぶ声に我に返り・・・自分はその鮮烈な”赤”に見惚れていたのだ、と気づかされた。

今まで”美しい”と感じたことはある。魔法の術式やその形成されていく形、色合い・・・しかし魔法が絡まない中でここまで”美しい”と思っただけではない。初めての感覚に戸惑いを隠せない私はソレを誤魔化すようにその小さな額に指を置いた。

「そなたに祝福を」

指を通して”祝福”という名の魔法が赤子に流れ込んでいく。

「その身は美しく、その心は清らかに、健やかな命を」

最後にその額に口付けを落とす。これで祝福は成された。

背後でああ・・・と小さな悲鳴が上がる。ついで側室の名を呼ぶ声と嗚咽、急にあたりが騒がしくなった。

(・・・祝福を授けたばかりだというのに)

その時ガラにもなく目の前の赤子が不憫だと思った。

そして同時に先ほどからどうにも調子がおかしいそんな自分の様子に戸惑い、さつさと塔に帰ってしまおうと屈めていた身を起こそうとした・・・が、それはあえなく失敗に終わった。

垂れた私の白髪をしっかり握って離さない小さな手、そしてすぐ目の目には閉じられていたはずの二つのルビーの眼まかがこちらを見ていた。

「・・・っ!？」

体に雷が落ちた・・・とでも表現すればいいのだろうか、とにもか

くにもその時私が受けた衝撃というのはそれほどのものだったという
ことを理解してもらいたい。
急に心拍があがり、身の内に宿るほのかに熱を帯びたむず痒いよう
な不思議な感覚を覚えた・・・今までにない体の不調に一体どう対
処すればいいのかさっぱりわからない。

それ以上動くことも出来ずに・・・いや違う、動きたくなどなかつ
た。ただそのままその眼に捕らわれていたかった、もっとその眼を
見続けていたかった。

本当にいったいどうしてしまったのだろうか、私は？

「あー・・・」

赤子の手が漸く髪から離れ、その小さな両手がこちらに伸ばされた。

「・・・・・・・・・・」

そのまま身を引いてその場から立ち去ってしまえば私の人生は何も
変わらなかったかもしれない。

・・・しかし私は出会ってしまった。

小さなその手を片手で握りもう片方の腕でその身を抱き上げる。
その体はいとも簡単に壊れてしまいそうならい小さくて華奢だ、
だが抱いた腕に伝わる暖かな熱はその小さな命の輝きを主張してい
た。

「あー・・・！」

腕の中の彼女が笑う。

・・・ああわかった、この”気持ち”が一体何なのか。

「姫、私が」

そういえば昔、兄弟子に借りた書物の中にこの”気持ち”と似たようなことが書いてあったのを思い出した。そうこれは・・・

「私が貴女の”母”になってみせましょう」

母性だ。

*

庭園に足を踏み入れれば茂みの向こうからこちらに駆けってくる小さな人影が視界に入る。

「へびー！！」

勢いよく私の足元に飛びついてきたその体をそのまま抱き上げれば彼女は嬉しそうにきゃっきゃっつと笑った。

「へびー！たかぁーい」

「はい、私の可愛いロザリアご機嫌いかがあ？」

「うるわしくってよー」

まだ舌つたらずさが残る3歳児をあやすその光景は微笑ましく・・・は残念ながら見えなかった。

原色カラーまぶしいオカマと麗しい幼女の図なんて傍から見れば怪しいことこの上ない。

だが周囲の誰もそれに突っ込めないのは見た目も中身も半端ない魔術師の実力を恐れていることか、はたまたその幼女が異様にその魔術師になついているせいか・・・あるいは両方かもしれない。

「へびだーいすき」

「私も大好きよー」

偏屈な性格の一人かれの魔術師がとてつもない勘違いの上に弱冠道を誤つてしまつてから5年。

彼がその間違いと本当のその”気持ち”に気づくまでには、更にあと5年ほど時間を要するのであった。

番外編く勘違い（後書き）

まあこういうわけですねw

母性っておまwってなるけどまあ気にしない。

偏屈というよりはド天然の要素も入っているのかもしれない。

ちなみに”お母さん”発言をしたときたまたまその声を聞いてしまった侍女や医者たちはドン引きしたそうです。

番外編〜兄弟子の話（前書き）

蛇の兄弟子回想。短いです。

番外編〜兄弟子の話

今日は俺の弟弟子おとういの話でもしようか。

あいつは昔から魔法の探求一筋でその他のことには興味がなかったせいか初めて会う人間には”根暗”だの”陰湿そう”だのと暗いイメージをもたれがちだったが、本当は根が真面目で何事にもまっすぐで・・・たまに頑固なところがあつたりするがいいやつだと俺は知っている。

・・・まあ確かに、目元は細くてつりあがってるし研究ばっかで外に出ないから肌は病人みたいに白いし、おまけに手入れされていな髪は伸ばされ放題で子供が見たら確実に泣くレベルの見ただ目ではある。

いや決して顔立ちが悪くないのだ、髪を切って少しでも笑えば（と行って一度笑ってみるといったときにはこれでもかというぐらい悪事を企んでいそうな笑い方をされたが・・・）もっと人当たりも良くなるだろうに。

確かに魔法に携わるものとして探求にいそしむのは悪いことではない。

だがそれがだけが全てではないだろう、と何度か説教じみた助言はしているもののあいつは「必要ない」の一言でいつも終わらせてしまっていた。

嘆かわしいことに、あれが師の後を継ぎ、城付きの筆頭魔術師なつた後もそれは変わらなかった。

「そうなのよっ!!」

かつての面影は半分もない・・・あらぬ方向に変わり果てた弟弟子は化粧が崩れるのもお構いなしにその目に再び涙をためて叫んだ。

「あの子が最近私を避けるの――!!」

「・・・は？」

二度上半身を激しく揺らされ話どころではなくなった。

*

漸くすると落ち着いたのか彼（仮）はぼつりぼつりと話し始めた。それを要約すればこれが母性を向ける相手・・・つまり薔薇姫に最近あからさまにさけられている、ということ。

「ほんのちよつと前までは”蛇ー蛇ー”って私の後ろついてきたりしてほんつと可愛かったのに・・・最近じゃろくに会いにきてもくれないし、城であっても目はそらされるし・・・」

「・・・それはごくごく一般的な反応じゃないだろうか。」

とは後々面倒くさいので口にはださない。

そもそも常識的に考えてこれに懐くほうがおかしいのだ。

城内で一番の変人と名高く、あからさまに見た目（いろんな意味で）

不審者、遭遇したくない人NO1に上げられるこいつにあの薔薇姫は臆することもなく懐いていた。生まれたときから身近にいたせいもあるのだろうが・・・あの姫も相当な変わり者だろう。

しかしその関係は今、一方的に崩されてしまっているようだ。

(それはつまりなんだ、思春期ってやつか?)

確か10を過ぎたばかりのはずだ。まだまだ幼いようにも見えるがこの時代10を過ぎれば”少女”は”女性”へといち早く変化していく時期だ。

「ねえっどうすればいいの!？」

「あゝ・・・その何だ・・・こうなる前にお前、姫さんに何かいったりとか言われたりとかしなかったか？」

「え? そうねえ・・・」

幼く無垢なだけの少女はやがてそうではなくなる。次第に現実を理解してくるものだ。

「そっいえば」

「あるのか？」

「2ヶ月ぐらい前かしら、”蛇は『おかま』なの?”って聞かれ

「それだな」

「ええっ！？何だよ！？」

すぱっと言い放った俺に奴は絶叫した。

「・・・ちなみにお前は何て答えたんだ？」

「違うわ、私はあなたの母親よ」・・・って、ちよっと！！人の話聞いているの！？寝てんじゃないわよっ！！」

「寝てるんじゃないよ、脱力してんだ！！」

馬鹿だ、こいつ本当に馬鹿だ。

「大体年頃の女の子がオカマ野郎に”母親です”っていわれて喜ぶわけねえだろうが！！」

「誰がオカマよ！！私はオカマなんかじゃないわ！」

「鏡見ていっぺん出直して来——————い！！！！！！」

何ですよ！！と五月蠅くわめく彼を椅子に縛・・・座らせると俺は一息つくためにお茶を飲み部屋を出たのだ。

・・・とにかく誰でもいいからもう一人突込みがほしい気分だ。

番外編〜兄弟子の話（後書き）

これはさすがにまずいとおもった兄弟子はこの後懇々と蛇に説教をかまし、その勘違いな思いを訂正させるにいたるのでした。

ちなみに以下薔薇姫と蛇の会話詳細。

姫の中でオカマ＝男色家のイメージがあるみたい。

『ねえ蛇、蛇は”おかま”なの？』

『あら誰がそんなこといったのお？』

『みんながいつてたわ』

『ああ、それはそれは・・・（後でしっかり探しだして・・・ふふふ）。違っわよお』

『そうなの？』

『ええ』

『よかった！！じゃあ、もう一つ聞いてもいい？』

『なあに？』

『蛇は私のこと好き？』

『ええ、大好きよ』

『本当!?!?』

『ええ、だって私は貴女の”母親”ですもの』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8182/>

蛇と薔薇

2011年4月16日20時18分発行